Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

第3号
SUMMER
1998

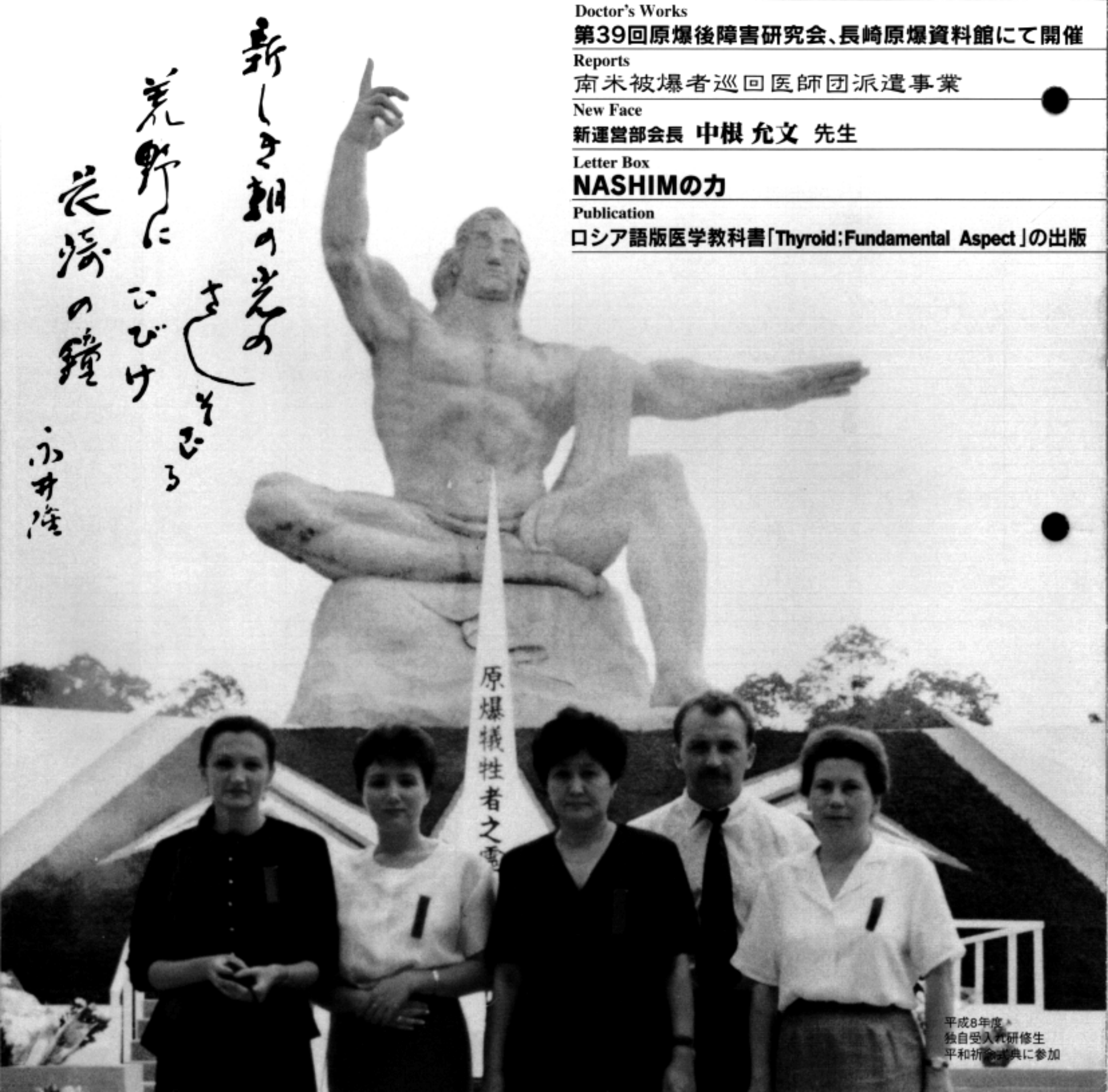
ヒバクシャ医療の「今」を発信する

# なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

発行◎平成10年8月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

What's project for trainees from abroad?
**研修生受入れ事業／原研公開セミナー**
Doctor's Works
**第39回原爆後障害研究会、長崎原爆資料館にて開催**
Reports
南米被爆者巡回医師団派遣事業
New Face
**新運営部会長 中根 允文 先生**
Letter Box
**NASHIMの力**
Publication
**ロシア語版医学教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版**




平成8年度
独自受入れ研修生
平和祈念式典に参加

横山長崎大学長表敬訪問
（平成9年度独自受入れ研修生）

# 研修による人材育成は世界のヒバクシャ医療を広く深いものにする

**長崎が有する被爆者医療の実績と長期的視野に立ち、ヒバクシャ医療の現場で日夜活動しておられるチェルノブイリ関連諸国及びカザフスタン共和国のヒバクシャ医療従事者を招き人材育成のための受入れ研修・専門医師等の派遣事業を推進しています。**

我が国にチェルノブイリ関連諸国の支援NGOは約30団体ほどあり、これらの国々からヒバクした子供達を招いて治療をしたり、ホームステイをさせて日本の子供達と交流を図ったり、医療機器を寄付したり、それぞれ独自の理念や考え方に基づき活発な活動を展開されています。

NASHIMは、被爆地長崎の使命として以下5つの分野の事業を実施しています。①研修生受入れ・専門医師等の派遣事業、②在外被爆者（南米・北米）渡日治療事業、③普及啓発事業、④出版事業、⑤永井隆 平和記念・長崎賞の授与

今回は、①について少し詳しく説明します。

## I 独自受入れ事業

放射線による人体への影響の特徴として、晩発性の後障害が挙げられます。そのためには長期的な視野に立って医療を行う事が不可欠です。そして、国際ヒバクシャ医療協力を行うには、相手国のしっかりした機関（カウンターパート）と信頼関係を確立する事が大切です。NASHIMでは、ベラルーシ共和国のゴメリ州立病院（放射能汚染が最も深刻な地域）、長崎大学医学部との姉妹校であるベラルーシ共和国・ミンスク医科大学及び、カザフスタン共和国・セミパラチンスク医科大学等をカウンターパートとして、主にこれらの機関から研修生を受入れています。費用は全額NASHIM負担です。

## II 共同事業

カウンターパートは、何も外国ばかりではありません。国内で活動しているNGOと共同で医師等の受入れ研修、普及啓発事業も実施しています。秋田において積極的な活動を展開している秋田ベラルーシ友好協会から平成8年度より延べ4名の医師が来崎し研修を受けました。また秋田市で講演会をし、ヒバクシャ医療の普及啓発を行いました。今年度も2名の医師の受入れ研修と秋田市でのシンポジウムを計画しています。費用は共同で負担します。

## III 窓口調整事業

外務省や日本赤十字社、笹川記念保健協力財団等から研修受入れの依頼があった場合に、NASHIMの研修機関の連絡調整を行う事業です。

昨年度は、笹川記念保健協力財団の招きでベラルーシ共和国保健大臣一行が来崎し、8月9日の平和祈念式典に参列し献花をされました。

## IV 専門医師等派遣事業

研修の成果が研修生帰国後の医療現場で生かされているかどうか、研修の内容が妥当であったかどうかなどをフォローアップするため、専門医師等の派遣を行い今後の研修の質を高めるものです。更に事業展開の調査も行います。

以上研修の形態は様々ですが、医療現場から遊離せず常に研修内容のフィードバック作業を行い、効果の高い、永続性のある研修を実施しています。

また、出版事業と連動してロシア語版の普及啓蒙書「放射能Q&A」や、医学・医療教科書を作成して教育研修効果を更に高く幅広いものにしています。

研修・人材育成は、目立たない事業ですが、ヒバクシャが世界各地で多数発生している現在、人類の生存にとって最重要課題です。

平成9年度までの医師等の受入れ・派遣の年度別・国別状況は左表のとおりです。

■平成9年度までの医師等の受入れ・派遣の年度別・国別状況

| 区分 | | 5年度 | 6年度 | 7年度 | 8年度 | 9年度 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 独自事業 | | 5 | 5 | 6 | 7 | 5 | 28 |
| チェルノブイリ関連 | ロシア連邦 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| | ベラルーシ共和国 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 9 |
| | ウクライナ | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 9 |
| | 計 | 5 | 5 | 5 | 5 | 3 | 23 |
| カザフスタン共和国 | | − | − | − | 1 | 1 | 2 |
| 韓国 | | − | − | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 共同事業 | | − | − | 1 | 1 | 3 | 5 |
| 放影研 | | − | − | 1 | − | − | 1 |
| ベラルーシ友好協会 | | − | − | − | 1 | 3 | 4 |
| 調整事業 | | 31 | 39 | 25 | 16 | 9 | 120 |
| 外務省 | | 19 | 17 | 17 | − | 1 | 54 |
| 日本赤十字社 | | 2 | 3 | 8 | 3 | 3 | 19 |
| 笹川記念保健協力財団 | | 10 | 10 | − | 10 | 3 | 33 |
| WHO共同研究 | | − | 6 | − | − | − | 6 |
| HICARE・広島大 | | − | 3 | − | 3 | 2 | 8 |
| 医師等派遣 | | − | − | − | 5 | 2 | 7 |
| ベラルーシ共和国 | | − | − | − | − | 1 | 1 |
| ウクライナ | | − | − | − | 5 | − | 5 |
| カザフスタン共和国 | | − | − | − | − | 1 | 1 |

## 原研公開セミナー開催のお知らせ

日時　8月8日(土)午後2時
場所　長崎大学医学部ポンペ会館

入場無料

原研公開セミナーは、長崎大学医学部原爆後障害研究施設（原研）の主催で、一般の方々に、放射能と健康の関係などについて理解を深めてもらうために毎年行っているもので、平成8年度からNASHIMも共催して、パネル展を併催しています。旧ソ連邦から来崎されている医師の方々（上の記事参照）に現地の医療の実際やチェルノブイリ事故についての話を聞くのに加え、今回は特別講演として、京都大学の**塚谷恒雄**先生をお招きして**「カザフスタン共和国の環境問題」**についてご講演いただく予定です。塚谷先生はすでにカザフ共和国を40回以上も訪問されており、旧ソ連邦時代に同国のセミパラチンスクで行われた核実験の実態についてもご講演いただく予定になっています。

詳しいお問い合わせは、長崎県原爆被爆者対策課内（NASHIM：TEL/095−823−4278）まで御連絡下さい。

「測ってみよう放射線（実習）」で説明をされる奥村教授

「わかりやすい放射能と健康のはなし」を熱心に聞く一般参加者

# Doctor's Works

## 第39回 原爆後障害研究会、長崎原爆資料館にて開催

長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設長　関根 一郎

平成10年6月7日(日)、第39回原子爆弾後障害研究会が長崎で行われました。本研究会は、長崎市および広島市で交互に毎年開かれ、今年は2年前に新装なった原爆資料館を会場として開催されました。

原爆による人体の被害は原爆直後見られた急性障害とその後白血病や種々の癌の増加をはじめとする後障害に分けられます。医学部に設置されている原爆後障害医療研究施設(原研)もこの後障害研究のためにできたものです。今年も長崎と広島の大学、放射線影響研究所、原対協の健康管理センターの医師や研究者約160名が集まって、原爆被爆者に関する日頃の研究成果が報告されました。原爆後50年以上が経過した最近の本研究会では、原爆被爆者の健康についての研究の他に、NASHIM事業と関連の深いチェルノブイリ原発事故や旧ソ連邦核実験場のあったカザフ共和国セミパラチンスクに関する医学調査、研究といった広く世界にまたがるヒバクシャのことも話題になるようになりました。特別講演は台北市の張武修先生をお招きして、「台湾の放射能汚染アパートの居住者における健康への影響」についてお話願い、放射能で汚染された鉄骨を使った建物に住む人達の放射線被曝の実態を紹介していただきました。

また、「放射線発癌の最近の知見」と題してのシンポジウムでは放射線による発癌機構解明の研究の最前線の成果が報告されました。会場ロビーでは、NASHIMの活動をまとめたパネル展示会も開催され、参加者にNASHIMへの理解を深めてもらいました。世界で唯一の被爆国としての責務として、また被爆者の健康増進のために、被爆者の健康に関する調査、研究は今後も必要との認識を深めつつ会は終了しました。

第二会場(平和学習室)

研究発表をされる関根先生

# New Face

**新運営部会長**

## 中根 允文(よしぶみ) 先生

本年度から、NASHIMの運営委員会運営部会長として、会の世話をすることになったのが、長崎大学医学部精神神経科学講座教授の中根允文先生です。

先生の教室は、精神医学・医療の研究と診療そして教育に当たっており、中でも「社会精神医学」的な研究分野を専門として、様々な精神的問題に及ぼす社会的要因を調査研究してきています。中でも「長崎大水害」や「雲仙普賢岳噴火災害」などによる被災住民の精神的負担に関する研究は注目されています。ごく最近まで継続された、長崎における原爆被爆者の精神健康調査は、原爆被爆に加えて高齢化という悪条件のもと、精神面における多大な問題に苦悩の日々を送っている被爆者の実情を明らかにしました。その結果は、調査に協力した方々への報告会を繰り返すことでフィードバックされ、更に長崎県福祉保健部の協力で「原爆被爆者の健康について――こころの健康ガイド」という冊子になって、被爆者の心の健康のための解説書として配布されました。

チェルノブイリ事故に伴って被災者のメンタルヘルスに関心を持つ同地域の研究者が、世界保健機関(WHO)の紹介やNASHIMの事業の一環として、同教室を訪ねるようになり、中根先生もこの数年運営部会委員の仕事に参加してこられました。新運営部会長は、「NASHIMの活動も今や第二ステージにあり、国内・国際的に認知されるような新機軸を以て新規事業に取り組みたい」と意欲を示しておられます。更なる御支援のほど宜しくお願いします。

# Reports 研修レポート

## 南米被爆者巡回医師団派遣事業

日本赤十字社長崎原爆病院　院長　田口　厚

「南米被爆者巡回医師団派遣事業」は、1985年より外務省・厚生省・長崎県・広島県の共同事業として長崎・広島で被爆し、その後南米に移住された方々のために2年に1度行われているもので、今秋には8回目の派遣が予定されています。通常は長崎、広島の医師3名と厚生省から1名、それと広島県から2名の事務官が派遣され、約3週間かけて、まず被爆者の多いブラジルを全員で巡回し、その後2班に分かれて南米を一巡しています。事業内容は、まず予め現地の医療機関で受けた検診結果についての詳しい説明を行い、もし療養指導あるいは精密検査を行う必要があると判断すれば、一旦日本に帰国して頂き治養を行うというものです。南米には現在約200名の被爆者が居住されていますが、各国によって医療費その他でかなり異なるという現状があり、その意味からも日本政府のこのような事業の継続は非常に大切なものになっています。

しかし実際問題として、日本の20倍近くの面積がある南米大陸をくまなく回るのはとても無理なので、現在は被爆者の方に交通の便のよい医療機関や外務省在外公館に集まってもらい、そこで検診、講演や面談などを実施しています。長崎から空路30時間という地理的な問題や言葉の問題(現地はポルトガル語とスペイン語)、さらには治安の問題などがありますが、現地の人たちの温かい歓迎と各国の日本大使館・領事館の御協力がこの事業の大きな支えになっています。現在、受診者の病態はやはり高血圧症・糖尿病・関節症・リウマチなどといった加齢によるものと生活習慣病がほとんどで、今後はますますその傾向が強まると考えられます。

現地の被爆者から健康相談を受ける田口先生

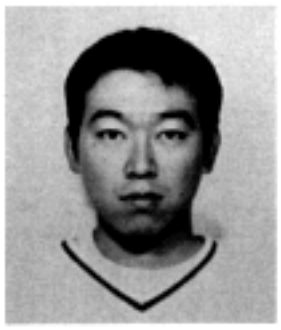
私自身も二度にわたってこの事業に参加しましたが、南米大陸の雄大さ、日本からの移住者の御苦労と在外被爆者の現状を身近に知り、また珍しい食べ物(焼肉・果物・アルコール)や音楽(サンバ・タンゴ)に巡り合うという貴重な体験もさせて頂きました。今後は、できれば長崎からの医師派遣人数を増やした上で、長崎で被爆された方が多数暮らされているというボリビアのサンファン地区に是非赴いて、移住者の歴史・環境を知った上での検診と指導を行っていく必要があると考えています。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 なしむ 第3号 SUMMER 1998 発行◎平成10年8月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel.・Fax 095-823-4278

# Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

（長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。）



## NASHIMの力

NHK大阪放送局
小田切 千さん

平成6年より9年までNHK長崎放送局の「長崎打町発市」等で活躍

私が「被爆」という長崎の過去の歴史に真剣に向きあったのは、新入職員としてNHK長崎放送局に赴任して2年目のことでした。その年はちょうど被爆50年。ラジオの特番で、「外国と日本との原爆に対する考えの違い」について中継リポートしました。私は中継するにあたって、長崎で勉強している4人の外国人留学生に、被爆者の方の体験談を聞いてもらったり、被爆遺構を見てもらったりしました。そして留学生にその都度インタビューし、自分の持つ原爆に対する考えの変化について語ってもらい、それを放送しました。中には核に対する考えを変えた留学生もいましたが、核保有国アメリカの留学生2人は、「それでも核は必要だ。」と答えたのです。信用できない他国と外交をしていくため、というのが彼らの理由でした。つまり、外交の手段として核の必要性を説いているのです。

私はNASHIMの様な機関こそが、このような考えに対する答えを出せるのではないかと考えます。被爆国日本で生まれた、放射能の犠牲者を救う立場にあるNASHIM。この組織が、日本だけでなく海外で活躍していくことが、インタビューに答えたアメリカ人留学生のような考え方や、放射能や核の世界的あり方に、一石を投じる力があるような気がします。

今後のご活躍を、大阪より応援しています。

## SCHEDULE

今後の活動スケジュール

8月3日～31日
平成10年度チェルノブイリ、カザフスタン共和国からの独自受入れ研修

平成10年度共同事業（秋田ベラルーシ友好協会）
＜前期＞ 8月3日～11日（長崎市）
＜後期＞ 8月31日～9月3日（秋田市）

8月5日～8日
NASHIMパネル展

8月8日
原研公開セミナー

8月16日～20日
長崎からの専門医師等韓国派遣事業
（フォローアップ調査）

9月10日～20日
NASHIM井石会長、池田副会長
カザフスタン共和国訪問
（第2回国際セミパラチンスク放射線影響会議出席及びフォローアップ調査）

### 編集後記

「なしむ」第3号を無事出すことができました。素人集団ゆえに毎回紙面作りに苦労していますが、その中で今回は、NASHIM事業の大きな柱である研修生受入事業についての特集を組みました。長崎はまもなく53回目の原爆記念日を迎えますが、これまで培ってきたヒバクシャ医療のノウハウを世界の舞台で役立てるために、NASHIMはこれからも様々な活動を行っていきたいと考えています。御支援よろしくお願い申し上げます。

## ロシア語版医学教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版

ベラルーシの医学雑誌でも紹介された教科書

今年3月、NASHIMは外務省の平成9年度補助事業として、ロシア語の教科書「**Thyroid;Fundamental Aspect**」（邦題;甲状腺学ー基礎編ー）を出版しました。

御存知の方も多いとは思いますが、チェルノブイリ原発の事故後、ベラルーシ共和国を中心に、特に小児の間で甲状腺癌が急増しています。これに対してNASHIMでは、これまでにも現地で活動している医師を招聘して研修を行ったり、長崎大学の専門家の派遣を行ってきましたが、この間現地医師との医療活動を行っていく過程において、特に若い医師達の間で相互の知識を共有するために不可欠な、教科書（特にロシア語で書かれた教科書）が不足していることが明らかになってきました。そこでNASHIMは、外務省の御協力の下、長崎大学医学部の医師と、その姉妹校であるミンスク医科大学の医師との共著という形で甲状腺についての教科書を作成し、1,000部を現地の医学部生に無料で配布しました。

平成10年6月来崎されたミンスク医科大学カバック副学長（左）と校正を担当したミンスク医科大からの留学生ロマノフスキー先生

今回、いわゆる「医師の卵達」に教科書を配布したことにより、将来的により現地の教育や医療活動がスムーズに行っていけると考えています。このような形でNASHIMが外務省の補助事業を行ったのは今回が初めてのことであり、今後も有効な支援を行っていきたいと考えています。